

国内の絵本美術館・児童文学館を訪ねて

—平成20年度国内研究員報告—

石原敏子
Toshi ISHIHARA

The object of my research as a researcher in Japan for the fiscal year 2008 was to enhance my understanding of children's literature and picturebooks. The research project consisted of two components: one was to widen my knowledge of this area of study through communication with the specialists at Baika Women's University, and the other was to research on the illustrations used for picturebooks by visiting museums specializing in picturebooks located in Japan. This paper reports the outcome of the latter, which involved visits to 62 institutions.

2008年度、国内研究員に任命された筆者は、絵本・児童文学の研究をテーマとして、梅花女子大学においてこれらの分野の研究を進めると同時に、国内における絵本美術館・児童文学館を踏査するという一年間の計画を立てた。

この報告は、絵本美術館・児童文学館の踏査の成果の一部を公開するものである。訪問したすべての機関を数えると、のべ62件に達した。ここでは、絵本・児童文学に直接関わるもののみを取り上げることにした。参考として、全訪問機関を別表に挙げる。

研修旅行(1)

2008年4月2日(休)

1) 大阪府立国際児童文学館

梅花女子大学児童文学科新入生の研修に参加。以前何度か訪れたことがあるが、久しぶりでなつかしい。比較的近郊にありながら、最近足は運んでいなかったのは残念なことである。図書館員の方から説明を受けた上、書庫を見学し、この文学館の所蔵本を直に目にする事ができた。多くの貴重な資料に囲まれ、これからの一年間に自分のすべきことを考え、身の引き締まる思いがした。春休みにすでに研究を始めていた「ちりめん本」にも触れ、意欲が高まる。後日、大阪府知事から、この文学館の行く末を考える議論が出されることになるが、これ

ら貴重な資料が丁寧に保存されることを強く希望する。

年度初めに、これからの研究計画を確認し、研究意欲を高めることができた点で、よい出発となった。

研修旅行(2)

2008年4月11日(金)

2) 日本郷土玩具博物館

新神戸から福山まで新幹線。山陽本線に乗り換え、松永まで。駅から歩いて5分。

平成6年(1994)に開館され、日本および世界の郷土玩具50,000点を収蔵している。こどもの成長を願うもの、長寿や健康を祈るもの、さまざまな思いがこめられた玩具に囲まれて、玩具はこどもの遊び道具であるのみならず、そこには「人々の祈りや願いがこめられて」(当館パンフレット) いるという生活の基本を再認識する見学だった。

3) かぐや姫美術館(本立寺)

松永から山陽本線で三原まで。三原から呉線で三駅目の忠海へ。瀬戸内海の島々を見ながら走る列車であった。桜がまだ咲いていて美しい。

忠海の駅前から歩いて、10分程度。お寺は開いていたが、美術館の方は予約が必要らしく、入ることができなかった。前もって確認しておくべきだった。美術館には、江戸期の「かぐや姫」の写本や資料など300点があるらしく、ここまで来ているのに見られないのは残念だった。お寺の壁には、おとぎばなしの場面を描いた絵がかっている。境内にあった木を切ったときに、このような使い方をしたらしい。

4月12日(土)

4) 金子みすず記念館

JR山陰本線仙崎駅の近くにある。みすずの実家の文房具屋が、記念館として用いられている。奥に建てられた新館に、資料が掲示されている。壁に年表があり、時系列に沿ってその時々の場面に合わせて引用されている、みすずの詩がおもしろい。自死する前日に写真館で撮った写真には、迫るものがある。どんな気持ちで、カメラの前に座ったのだろう。

5) 安野光雅美術館

JR山口線津和野駅前にある。『安野光雅が手がけた本の装丁画——澤地久枝さんの著書を中心に』という企画展が開催中であった。それぞれの本にあった装丁を考えるのは、大変なことだろう。原画では、文字の入るべきところがすでに計算され、空白に残されている。絵だけでは間延びした感じがするが、文字が入り作品として出来上がると引き締まる。高峰秀子の本や、

国内の絵本美術館・児童文学館を訪ねて（石原）

他の文庫本の装丁作品が並んでいた。展示作品の中には、自分が以前読んでいた本もあり、今回はじめて安野氏の装丁であることを知った。

また、安野氏の『蚕の市』（1983）の原画も展示されていた。今では使われていないものなど、おもしろいものがいろいろと並ぶ蚕の市の様子を描く楽しい本だ。

4月13日(日)

6) 夢路郷土美術館

岡山の後樂園の近く。竹久夢路といえば、細身の女性を美しく描いたものが目に浮かぶが、今回出合ったのは、子どもを対象として描かれた絵で、新鮮であった。マザーグースを北原白秋に先行して訳し、それに絵を付けていたらしいが、出典を書いていなかったため、その第一訳者とは認められていないと説明があった。興味深いところである。少女雑誌向けの絵などもあり、当時の児童文化の豊かさを感じた。

7) 倉敷チボリ公園

この公園は、倉敷にある遊園地である。その中にアンデルセン図書館があると聞き、訪れることにした。遊園地内の図書館としては立派で、主要なアンデルセン絵本が揃えられており、また、批評書もいくらか並んでいた。遊園地で活動的に遊ぶ子どもたちが多いなか、こうした場所でゆっくりと親たちに絵本を読み聞かせてもらっている子どもが何人かいたのは、うれしい驚きであった。私も子ども用の椅子に腰掛けて、何冊かを楽しんだ。Errol Le Cainの絵本や、アンデルセンの自伝などを読んで時間を過ごした。

4月14日(月)

8) 日本郷土玩具館

倉敷の美観地区内にある。入ってすぐのところ、立版古を見つけた。その前の週に、研修先の梅花女子大学の加藤康子教授の講義で説明を聞いたところであった。こうした紙で作った立体おもちゃを、夕涼みに散歩する人に見せて競っていたらしい。また、それに灯りを入れたりもしていたと聞いた。パノラマ状に下絵が描いてあり、それを小刀で切って立ち上げるとのことであった。

そのとなりには、おもちゃ番付けがあった。横綱からはじまり、おもちゃの格付けがなされている。これも加藤先生によると、いろいろな番付けが作られていたそうだ。

今まで余り関心を持たなかった郷土玩具であるが、今回の研修旅行で二館を訪れて、おもちゃには、こどもの健全な成長をのぞむ祈りがこめられているという事実（それは当たり前のことであったのだが）を、再認識することになった。現代のおもちゃにも、そのような強い願いや気持ちがこめられているのだろうか。

松永の日本郷土玩具博物館は1994年に建てられ、新しいので管理も行き届いている。他方、倉敷の日本郷土玩具館は、米蔵の土蔵を生かした雰囲気ですばらしいが、昭和42年（1967）に開かれたもので、3万点もある収蔵品の今後の保存・管理が課題となりそうである。

研修旅行(3)

4月24日(木)

9) ちひろ美術館 東京

山手線の高田馬場で西武新宿線にのりかえ、上井草へ。閑静な住宅街にある建物で、落ち着いた雰囲気を持つ。後日、関西大学の建築専攻の学生がここを訪れ、この建築が「穏やかな気持ち」にさせてくれると、美術館の図書室に備えられたノートに書いたコメントが、ちひろ美術館の広報紙に掲載されることとなる（ちひろ美術館・東京「美術館・友の会だより」No. 162. 2009, 3. 1）。関西大学客員教授であられる、この美術館の副館長の松本由理子さんをお尋ねしたが、不在だった。

ちひろ生誕90年記念展『ちいちゃんの絵本』、および、ちひろ美術館コレクション展Ⅰ『ロシアの絵本』が開催中。ちひろさんの作品をじっくり時間をかけて見学した。ちひろさんのこどもの描きかたが、時とともに変わっていくのがわかる。彼女のお気に入りであったソファに座り、展示された原画を前に、作品となった絵本を読んだりする。また、図書室にはたくさんの絵本が置いてあって楽しい。ロシアの絵本展のなかでは、イワン・ビリービンの作品に惹かれる。エロール・ル・カインに似て、縁飾りの用い方に特色があるからだろう。アイコンを思わせる画風が興味深い。帰ってから調べてみると、吉田新一氏が、ル・カインに似た作風の画家の一人としてビリービンを挙げておられた（1999, 185）。

4月25日(金)

10) 世田谷文学館

新宿で京王線に乗り換え、芦花公園下車。人に尋ねたり、裏道を通ったり、迷いながら徒歩約10分。企画展は、『ファール昆虫記の世界』。ファールの昆虫記が、こどもたちの知識や自然との関わりにおいて重要な役割を果たしていることが、よくわかる。しかしながら、正直なところ、虫が苦手な私にとっては、心から楽しめる展示ではなかった。二階の常設展は、世田谷に関わる作家たちを紹介をしている。ジオラマによる文学作品の展開もおもしろかった。この文学館では、毎年、絵本作家を取り上げての企画をするようなので、どうしても見ておきたかった。一階の入り口付近に多くの絵本を置いており、その配置にも工夫が見られ、楽しく絵本を読める空間が作られているのが素晴らしい。

11) 板橋区立美術館

芦花公園から、新宿でメトロに乗り換え、神保町経由で高島平へ。ここからバスに乗る。やっと東京の喧騒を離れ、緑が多いところを走ることができ一息ついた。美術館は公園のすぐ隣にあり、落ち着いた気分のいいところである。今回の企画展は、『絵師がいっぱい：お江戸の御用絵師と民間画工』。当時梅花女子大学で受講中の江戸期の絵本との関連で見たかった展示である。

二階の展示場には、たたみをひいたコーナーを作り、屏風を飾っている。他には、所蔵の掛け軸などの展示があった。それぞれのコメントにセンスとユーモアがあり、楽しんで絵を鑑賞することができる。観衆を魅せる、うまい展示であった。

この美術館では、毎年ポーロニャ国際絵本原画展が開催される。これが、ここを訪問しておきたかったもう一つの理由である。

12) 相田みつを美術館

東京フォーラムの中にある。第33回企画展『みんなほんもの』を見る。児童精神科医佐々木正美氏との出会いから生まれた『育てたように子は育つ』（1999）の文庫化を記念した企画である。相田みつをさんの書とともに、佐々木氏が子どもの気持ちを思いながら、子育てをするおとなたちへのメッセージを送る本である。この本で言及されている書が展示されていた。ゆっくりと書を鑑賞しながら、言葉の意味を考える。やさしく揺れながら力強い文字が、真実を伝える。

4月26日(土)

13) 国立国会図書館 国際子ども図書館

『チェコへの扉—子どもの本の世界』が開催されていた。チェコは、絵本のはじめとされる『世界図絵』（1658）を描いたコメニウスの出身地であり、絵本には早くから強い関心を示していた国である。今回の特別展では、その歴史をたどって多くの絵本が紹介されていた。色が独特で、おもしろい。

二階の図書室の資料を見る。一階にある子どもの絵本室では、部屋四方の壁に沿って、また、中央に円く書棚が置かれ、憩いやすい空間であった。

14) 絵本学会「第二回研究講座」参加

日本女子大学において開催された「戦後の〈保育絵本〉を語る—『キンダーブック』を中心に」に参加する。この雑誌の編集に携わってこられた方々からその歴史や背景についてお話を伺った。今後、膨大な資料の整理がなされる必要があり、また、資料の保存の仕方に大きな課題がありそうである。

研修旅行(4)

5月10日(土)

15) 静岡アート・ギャラリー

午前、静岡での児童文学講義のボランティア活動を終え、午後、雨の中『絵で読む宮沢賢治展—賢治と絵本原画の世界』を見に行く。第一部は、賢治の生涯の紹介。妹を亡くし、自分も病気になり、それをおしてセールスのような仕事をしていたようだ。農場を作り、コミュニケーションを作ったりもしていたが、37歳の若さで亡くなってしまふ。彼の不思議な文学世界は、どこから生まれてきたのだろうか。

第二部は、彼の作品を絵本にした作品の展示である。特に、伊勢ひでこ、田島征三、荒井良二のものに、目をひかれた。暗く、重い雰囲気を与える作品が多い中で、荒井さんのものが、明るくほっとした。暗い作品は、どうも苦手だ。

5月11日(日)

16) 箱根 サン＝テグジュペリ 星の王子さまミュージアム

『星の王子さま』(1943)は、授業で何度も学生と読んできた作品である。どういったところなのか、一度見ておきたかった。

展示館の二階から展示が始まる。写真、資料、解説、そして作家の愛蔵品などが豊富にあり、夢中になる。サン＝テグジュペリの人生をたどる展示になっており、わかりやすい。ただ、資料が本物なのかコピーなのかわからないことがあり、時に戸惑うこともあったが、全体的にはよく構成された展示であった。

ニューヨークに亡命していたころの、彼の声を聞いた。祖国フランスに対する彼の立場への無理解や非難に、彼はどんなに激しく苦悩したことであろう。そのころ、レストランのナプキンなどに小さいひとの絵をよく描いていた。それをもとにストーリーを書くよう知り合いに勧められ、できあがったのが『星の王子さま』である。

展示の最後は『星の王子さま』の紹介で、王子が会うひとびとや動物、そして景色の模型があった。また、写真家に撮られた人生最後の写真には迫力があり、見るものを圧倒する。すでに自身の死を覚悟していたのであろうか。

さまざまな国の言語に訳された『星の王子さま』の展示もあった。日本では、二年ぐらい前に翻訳ラッシュになった。ホールでビデオを見る。本の内容の紹介にすぎないが、作品を手短かに提示しており、うまかった。

展示が充実していたのだろう、ミュージアムを後にしたときには、すでに二時間半が経っていた。知らぬ間に時間が過ぎていた。

5月13日(火)

17) 葉祥明美術館

小田原から東海道本線で大船まで、そこから一駅の北鎌倉へ。駅から徒歩10分。

『アンネのバラ』(2002)の原画の展示をしていた。ベルギーの植物学者が、アンネの父親にバラを送った。そのバラが株分けされて、世界中いろいろなところで咲いているようだ。葉さんもそれをもらってきて、咲かせている。その花のことを書いた絵本の原画展示である。このバラを伝えることが、アンネのことを伝えることになる。さっそく、帰ったらこの本を手に入れることにした。

この画家は、「地平線の画家」と呼ばれている。水平線のところに家がぼつり立っていたり、木が一本はえていたり、という感じの絵が多い。以前は好みではなかったが、今回原画を見て、その地平線の描き方にとてどころがこもっているのが感じられ、いろいろな思いを読み取ることができた。やはり、原画でないと伝わらないものがたくさんある。

二階建てのすばらしい洋館を、一軒そのまま使った美術館である。アメリカの古い家を思い出させる。「友人の家に遊びに行くような気持ちで、心を癒し、安らぎのひとときをすごしていただける美術館」(BOOKEND No. 2, 149)ということであるらしく、まさにそういった家庭的な雰囲気を持つ空間であった。

研修旅行(5)

5月30日(金)

18) ちひろ美術館 東京

前月とは展示が替わっており、『ちひろと俳句』『ちひろと一茶』の企画。ちひろさんの父上が俳句を詠んでいたらしく、その影響を受け、彼女もこの芸術に強い関心を持っていたようだ。

一茶や他の俳人の作とともに、ちひろさんの絵が展示されている。四季にふさわしい季語が選ばれ、それを描いた作品が出されている。ちひろさんの描く絵そのものが省略を主とし、俳句の手法に近いところがあるので、そういう点での共通性を感じながら見ていくのもおもしろい。また、絵本のなかに並ぶ絵が、そのコンテキストから切り離され、違った雰囲気でも鑑賞できるのも興味深い。

もう一つの企画展は、ちひろ美術館コレクション展Ⅱ『絵本どうぶつ百態』である。異なるスタイルで描かれたさまざまな国の作品が、動物の種類でグループ化されることで、動物の生態のいろいろな側面が見え、おもしろい企画である。

今回気になった画家は、スーダンの作家、フセイン・ジャマアーン（『魔法のビーズ』：ぶつぶつしたビーズ状のものが効果的である）と、モスクワ生まれのヴィクトル・ドゥヴィードフ。帰ってから、調べることにする。

6月1日(日)

19) 中近東文化センター附属博物館

京王井の頭線で吉祥寺まで、急行で直行。バスで20分ほどで西野バス停。ここから徒歩10分。暑い中、やっと探しあてた。

特別展は『煌きのペルシャ陶器』で、多くの陶器が展示されていた。私の関心は、ル・カイ
ン絵本との関係で、その文様にある。花紋様や、どこまでも続きそうなアラベスク模様が美しい。残念ながら、模様のある陶器の数はそう多くなかった。常設展は、中近東の歴史をたどって、遺物を展示していた。貴重な資料が多くあり、興味深かった。

研修旅行(6)

6月20日(金)

20) 絵本児童文学研究センター

新千歳空港から、JRで小樽へ向かう。小樽駅から歩いて5分ぐらいのビルに、絵本児童文学センターがある。センターは、特定非営利活動法人で、大人の生涯教育として、児童文化を学ぶ講座を開いている。2008年春からこのセンターの会員となり、通信講座を受け、児童文学について考える機会を持ち始めていた。そのため、この機会を利用してセンターを訪問し、その活動の一部を知ることにした。職員さんの笑顔に迎えられた。名誉会長の故河合隼雄さんのレリーフが飾られた図書室で、多くの絵本や児童書に囲まれて職員さんからお話を聞き、しばらく読書をしてすごした。大人たちが、絵本や児童書についてしっかりとした認識をもつことの必要性、そして、それらの作品がもたらしてくれるこころの豊かさを、再認識することになった。

6月21日(土)

21) 第11回絵本学会大会 於：藤女子大学

上記学会に出席。特に、『ごんぎつね』(1986)の作者、黒井健さんの講演「児童文学に絵をそえること」に興味をもって聴く。新美南吉や宮沢賢治との出会いが語られ、作家の絵本制作の過程を少し垣間見ることができた。

6月22日(日)

22) 絵本児童文学研究センター

再び、小樽の絵本児童文学研究センターへ。講師、工藤左千夫氏の講義に参加する。普段、講義はDVDに記録され通信会員のもとへ送られてくるのであるが、今回は直接におはなしを聞き、いつもと違う緊張感のなか講義を受けることとなった。

6月24日(火)

23) 北海道立旭川美術館

以前、関西で開催されたときに機会を逸していた『リサとガスパール&ペネロペ展』を見に行く。多くの原画に触れることができた上に、DVDが流されており、絵担当のハレンス・レーベンと、文担当のアン・グットマンの絶妙の共作で、これらのシリーズが生み出されていることを知った。お二人の人柄が、これらのキャラクターの人気を支えていることがわかる。

研修旅行(7)

7月3日(木)

24) 安曇野ちひろ美術館

安曇野のちひろ美術館で、世界の絵本作家の展示が三回にわたって開催されることを知り、その一回目の開期が終わる直前に駆け込む。名古屋から、ワイドビュー信濃で松本まで。大糸線の信濃松川から、タクシー。

この美術館に、エロール・ル・カインの原画があることを知り、事前に連絡し、見せていただけるようお願いしておいた。まずは、美術館を見て回る。ちひろさんの作品の展示が二部屋。別棟に、世界の絵本作家の絵の展示、および、世界の本の歴史の展示室がある。どの部屋もおもしろい。特に、別館を見学する。

ル・カインの原画は翌日に見せていただくことにする。館長の松本猛さん、副館長の竹迫裕子さんが挨拶に出てきてくださる。ご丁寧に、ありがとうございます。

7月4日(金)

25) 安曇野ちひろ美術館

鳥の声で目がさめる、幸せな目覚め。森の香りを胸一杯に、深呼吸を繰り返す。

朝から、再びちひろ美術館へ。一番にル・カインの原画を見せてもらう。まず手を洗い、作業室の奥にある、分厚い防火用扉を二枚も開け、くつを脱ぎマスクをし、学芸員さんは、白衣を着、手袋をする。

いくつも並ぶ桐の棚。その引き出しに、上紙を付けて何枚かの絵が納められている。丁寧に一段を取り出し、そこから二枚。別の引き出しからも一枚を出し、作業台の上のせる。一枚目は、絵本 *Mr Mistoffelees with Mungojerry and Rampelteazer* (1990) からのもので、猫が垣根の上で、スプーン、フォーク、ナイフを用いて軽業をしている絵。薄紙がめくられると、その瞬間、ル・カインの念が空気の中に現れたかのようで、まわりの空気の温度が変わった。画面から粒子のようなものが飛び出し、こちらに向かって射してくる感じ。絵の霊気だろう。猫はわたしをまっすぐに見据え、あげくの果てに、こちらのエネルギーを全て吸い取ってしまいそうな迫力だ。ことばを失い、しばらく眺めるしかなかった。

あとの二枚は、絵本 *Aladdin and the Wonderful Lamp* (1981) の絵である。一枚は表紙で、もう一枚は、"page 1" と書いてあった（と思うがよく覚えていない、それほど絵に圧倒されていたということだろう）ので、後日家に戻って確かめたが、この絵本のどこにも見当たらず、学芸員さんにお尋ねしたところ、やはり、この一枚は最終的に絵本に用いられなかったということである。確かに、ちひろ美術館発行の美術館コレクション・カタログ『ちひろと世界の絵本画家たち』（2000）にも、この1枚は、この絵本のための習作であったと記されている。

表紙は、くすんだ緑色をベースにアラジンの驚いた様子を描いたもの。彼を取り巻いて多くの植物が描かれているが、その描き方はイスラム芸術やインドの細密画を思わせ、まさにル・カイン風である。もう一枚は、アラビアのお姫さまを描いたもの。細い三日月ときらめく星、暮れかかる夜空を背景に、東洋風の模様のあるじゅうたんの上に妖艶さをかもし出しながら座る、オレンジとピンクの衣装を身にまとう王妃。部屋の窓の格子だろうか、あるいは、繊細なレース模様の掛け物、これら全てを魔法の世界のものにするかのように、ランプからの細い煙が、右画面下から左画面上方へと漂っている。この絵を囲う羽を描いた縁取り、その色は王妃の衣装の色と同調するオレンジである。その色使いや、細かな描写、縁取りの羽の妙が、エキゾチックなエロティシズムを醸し出している。なんと美しい絵だろう。

ちひろ美術館には、もう一枚、ル・カインの原画があるそうである。絵本 *Mr. Mistoffelees* の中の別の絵で、7月中旬からちひろ美術館 東京で開催される『絵本作家の技法』という特別展に出展されるため、現在、東京に送られているということであった。残念ながら、今回目にすることはできなかったが、他の三枚に圧倒されたので、その魅力はこれをもって知るべしという感じであった。

その後、『世界の絵本作家展I』を重点的に見た。絵に描かれたこどものイメージがテーマとされ、さまざまな国の作家の絵が並ぶなか、全体的な雰囲気をとらえようとしたが、無理とわかった。むしろ、個々の作家の個性を楽しみ、そこから自分の気持ちに訴えてくる作品を見つける、そういう出会いの場所と考えることにした。その中で一番気にかかったのが、Rebecca Caudill 作、Ellen Raskin 絵の *Come Along!* (1969) という作品の一枚だった。この絵の不思議な静謐さに惹かれたのと同時に、この作家が小説も書いているということを知り、調べると、以前に読んでいたニューベリー賞受賞作 *The Westing Game* (1978) の作者であることがわかり驚いた。後日調査を進め、*Nothing Ever Happens on My Block* (1966) を始め、いろいろな絵本が手に入りつつある。*Nothing Ever Happens on My Block* は、実際には自分のまわりでいろいろなことが起こっているのに、それに気づかない少年を描き、ものの見方の違いによる世界の顛われ方を扱うおもしろい作品である。もう一冊 *Spectacles* (1968) は、近視の少女のめがねを通しての世界の描写で、テーマは前作によく似ている。さらに調べたい作家である。

ミュージアム・ショップで、アンデルセンの『スノー・クイーン』、S. エイドリゲビシウスの絵のものを入手。

研修旅行(8)

7月14日(月)

26) 黒井健絵本ハウス

6月の絵本学会でこの作家の講演を聴き、どうしても訪れたくなった。緑に囲まれた、木の作りが落ち着いた雰囲気をかもし出す閑静な美術館。アンデルセンの『おやゆびひめ』の原画展であった。

二階には、『ぶたのモモコとフルーツパーラー』（1993）の原画があり、ユーモラスな描き方でおもしろい。描くときには、登場人物の生活の細部まで考え（マンションの見取り図まで！）、詳しく設定をしてから描くということである。いろいろなスケッチを見ることができた。

二階の片隅には、ゆっくりと絵本が読める部屋が用意してある。子ども部屋のように、落ち着く。黒井健さんのイラストの塗り絵も準備しているらしい。お絵描きも楽しいことだろう。

作者自筆サイン入りの『ごんぎつね』（1986）と『手ぶくろを買いに』（1988）を入手。先日、札幌でお話を聴きましたというと、向こうの方が「昨日までここにいたんですよ」とおっしゃっていた。

27) 絵本ミュージアム清里

黒井健絵本ハウスのほぼ向かいにある。このミュージアムは、ル・カインの原画を多く収蔵しているということである。前もって連絡を取っておいた。

常設展で、ル・カインの作品が展示されている。*Cupid and Psyche* (1977) やフェイバー社出版の詩の本のイラストなど、いろいろな作品の原画が一部屋に展示されている。また、*Thorn Rose* (1975) の縁飾りの原画もある。どれも繊細で丁寧な筆致で描かれており、見ていると息が止まりそうだ。ル・カインが幼かったころ、彼の祖母が人形を作りながらいろいろなおはなしを語ってくれ、それが、彼のストーリー作りの原型になっていったそうである。その幼いころのことを描いた、*Grandma* という絵もここにある。

特別展は、『くまのがっこう 絵本原画展—ジャッキーとおにいちゃんたちの楽しい一日—』。あいはらひろゆき／文、あだちなみ／絵の『くまのがっこう』（2002）シリーズからである。このシリーズは海外で翻訳もされ、人気とのこと。

ミュージアム・ショップで、ル・カインの『サー・オルフェオ』（2006）を入手する。英語版を探しているが今のところ見つからず、日本語訳を持っておくことにする。

その後、岡谷と八ヶ岳の小さな絵本美術館や、できれば、イルフ館へも行こうと予定していたが、気分がすぐれないため見合わせる。

7月15日(火)

28) 安曇野ちひろ美術館

『世界の絵本作家II』の部屋を先に目指す。特にテーマはないようだ。前回の訪問時に収蔵庫で見せていただいた、ル・カインの猫に再会する。しかし、今回は額に入れられ、ガラスの向こうのねこは、この前ほどの力を発することはなかった。非常に不思議な経験だ。この絵の持つ力を知りながら、実際にそれを感じることができない。残念だが、いい経験だった。

7月17日(木)

29) 安曇野ちひろ美術館

ル・カイン関係の資料を見せていただけるよう、事前をお願いをしていた。図書室で閲覧。まだ私が手に入れていない絵本が二冊あった。そのうちの一冊 *Molly Whuppie* (1983) は、Walter De La Mer 原作のテキストに少し手を加えているということで、これは是非調査したい作品である。後日、詳しく教えていただくことにする。

翌日7月18日には、静岡市で開かれているボランティアの勉強会で、アンデルセンの童話二作を扱い、多くのアンデルセン作品の絵本を紹介した。

研修旅行(9)

11月26日(水)

30) ちひろ美術館 東京

『生誕100年 夢と記憶の画家 茂田井武展』が開催中。茂田井武は、さまざまな職をへて画家になり、戦中から戦後にかけて多くの童画を残し、48歳で亡くなった。デフォルメされたイメージの中に、彼の人間性への信頼が見てとれる。彼の絵からは「ほの哀しいが暖かい声が語りかけてくる」と堀内誠一が述べているとおりである (154)。

31) トムズ・ボックス

吉祥寺にある絵本店。個性的な店である。荒井良二をはじめとして、多くの絵本作家を生み出してきた。原画展もよく催されている。豊富にそろった絵本キャラクターのピンバッジも、楽しそうである。近くにあれば、頻繁に通いたいところだ。

11月27日(木)

32) 国立国会図書館 国際子ども図書館

『童画の世界—絵雑誌とその画家たち』が開催中。明治20年代に出版された「少年園」など、児童雑誌の草創期を代表する作品や、大正期における近代的な児童観にもとづく幼児教育の必要性の認識から生まれた絵雑誌「コドモノクニ」「コドモアサヒ」、そして、昭和2年創刊の「キ

国内の絵本美術館・児童文学館を訪ねて（石原）

ンダーブック」などを代表に、児童雑誌の誕生、盛衰の歴史をたどる展示であった。普段、あまり目にすることのない貴重な資料が一堂に集められ、興味引かれる企画であった。

33) 台東区立下町風俗資料館

上野の不忍池のほとりにある。余り一般に知られていないようで、見つけるのが困難であった。

9月13日から11月30日まで、平成20年度特別展『知ってる？子どものむかしの遊び』が開催されており、上記の国際子ども図書館での展示との関連で、ぜひ見ておきたかった。

明治から昭和30年ごろまでの子どものおもちゃ―手作りの着物を着せた人形、ビー玉、コマ、ままごと、すごろくなど―が紹介されていた。こどもの健全な発育を願うという、先に国際子ども図書館で見た児童雑誌と同じ目標を持っている。また、塗り絵や、かるた、めんこなど、絵を施したものに関しては、児童雑誌の絵との関連での研究も、今後の課題となるであろう。

一階には、大正時代の東京・下町の家屋の模型が作られており、当時の生活の一端を知ることができるよう工夫されている。

11月28日(金)

34) 相田みつを美術館

いわさきちひろの作品とのコラボレーションによる本『みんなほんもの』（2008）の出版を記念する特別展があった。二人の作品には、ひとのやさしさを感じさせる点で共通するところがある。作品保護のため、ちひろさんの作品は特殊印刷技術によるコピーが出展されていたが、その中に一枚オリジナル作品があった。二つが並ぶと、残念ながら迫力が違うが、作品を後世に伝える為には仕方のないことである。

研修旅行(10)

12月18日(木)

35) 沖縄県立図書館

ある土地に特化した絵本とその地域の図書館との関わりについて、考えたいと思っている。特に、その歴史的・文化的な立ちから、沖縄に関心がある。たとえば、沖縄時事出版による「ふるさと絵本特選集」というシリーズの『ごーやー』や『がんばれハーリー』などといった、沖縄の食べ物や祭りについて描かれた絵本が頭に浮かぶが、こうした沖縄の風土・伝統・文化を扱う絵本にはどのようなものがあるのか、そして、地域の図書館はそれらをどのように扱っているのかを知りたくて訪問した。意外なことに、沖縄に関する絵本のコーナーは小さく、所蔵作品も少なかった。その中でも、田島征彦作『とんとんみーときじむなー』（1987）は、ガ

ジュマルの木やあだんの木と沖縄の人びとの生活とのつながりを、紅型を思わせるイメージを用いた絵で昔ばなし風に語る絵本で、ストーリーもおもしろく、色も美しく、興味をひかれた作品であった。

研修旅行(11)

2009年1月12日(月)

36) ふくやま文学館

『赤毛のアン』(1908)刊行100周年記念『モンゴメリの冬物語—アンとエミリーの世界』が開催中であった。来館者の多さにおどろく。やはり、『赤毛のアン』は人気の作品であることがわかる。関連事業として、『プリンス・エドワード島 七つの物語』と題して、写真家、吉村和敏氏による写真の提示と講演があり、これに参加する。『赤毛のアン』が生まれた土地の美しさを、鋭く切り取って見せてくれる写真家に感謝。

1月13日(火)

37) 安野光雅美術館

往く路で、雪がどんどん降ってくる。津和野に近づくにつれ、30センチ以上の積雪。

『安野光雅のデザイン—井上ひさしさんの「本」と「芝居のポスター」』展。安野氏は、長らく、井上ひさし氏の著書60冊以上の装丁や、こまつ座のポスターを手がけてきたそうである。井上氏の遅筆ぶりはよく知られているが、そのために、先にデザインし準備したポスターと内容が変わってしまい、使用されずに終わったということもあった、といエピソードなどとともに、デザイン画とポスターの実物が展示されており、比較しながら展示を楽しむことができた。

また、安野氏の『天動説の本』(1979)の原画の展示が行われていた。安野氏の星や宇宙への関心は強く、この美術館にプラネタリウムが作られているのも、その顕れである。前回は調整中で見られなかったが、今回、プラネタリウムで星座のはなしを楽しみ、宇宙の魅力を体で感ずることができた。

研修旅行(12)

2009年1月29日(木)

38) 徳島県立文学書道館

高速バスで、四国徳島へ。『ターシャ・チューダー展』を見学に行く。*Corgiville Christmas* (2002)の原画が展示の中心であった。弾むところでクリスマスを祝う、動物たちの姿が印象に残った。

コルデコット・オナー賞を獲得した *I is One* (1956) や、ABC絵本の *A is for Annabelle: A Doll's Alphabet* (1954) の存在を知り、後に手に入れた。第二会場では、チューダーの生活

国内の絵本美術館・児童文学館を訪ねて（石原）

を収録したDVDが上映されていた。かなり晩年の姿であるが、自分流の生活への情熱はあいかわらず強かった。

研修旅行(13)

2009年2月6日(金)

39) 祈りの丘絵本美術館

九州長崎大浦天主堂のすぐ近くにある。太田大八氏の90歳記念企画で『太田大八画伯絵本の軌跡（前期）』が開催中であった。『へっこきあねさが よめにきて』（1982）や『ながさきくんち』（1980）といった作品の原画が展示されていた。『かさ』（1975）は、少女が雨の中を駅まで一人で父親を迎えにいくというストーリーである。少女の不安な気持ちを表わすかのように、墨一色で描かれた情景の中を行く彼女の赤いかさは、父に会えるよろこびと、父をよろこばせたいという気持ちを表わしているのであろう。赤いかさが、原画では特に印象的だった。

三階は、大道あや常設展である。1909年、広島生まれ。長らく美容師として働くが、60歳から絵を描き始め、絵本の創作にも関わることになる。「素朴画家（ナイーブ・アーティスト）」と呼ばれるようである。その絵の迫力はすごい。展示されていた「びわの木の下」（1979）と題された絵は、びわの実のなる葉々や、咲き乱れるひまわりの花のあいだに、見え隠れする鶏、がちょう、ねこが作り出す生命力の賛歌である。一度見ただけで心に焼きつく作品である。

一階には、絵本や玩具のお店がある。ここで、大道あやの『へくそ花も花盛り―大道あや聞き書き一代記とその絵の世界』（2004）を手に入れた。

研修旅行(14)

2月14日(土)

40) 葉祥明美術館

春に続き、二度目の訪問である。二ヶ月に一度、葉氏によるミュージアム・トークがあることを知り、それに参加した。ファンも多くいるらしく、盛況であった。今回の特別展示は、動物を描いた初期の作品であった。地平線や風景を描いた絵を見慣れていた私には、驚きの題材であった。おはなしの後、葉氏が自作の詩を読まれ、その言葉に耳を澄まし、安らぎ、力をもらう時間が設けられていた。不思議な経験だった。

2月15日(日)

41) ワイルドスミス絵本美術館

伊豆高原に位置する。石作りの小さな館で、庭には銅製の彫刻などが置かれており、外観も楽しい。ブライアン・ワイルドスミスのカラフルな絵、夢を詰め込んだような絵が以前から好きで、どうしても訪れたかった美術館である。2007年にワイルドスミスが書いた文章のコピー

があった。“Our children are our future and our inheritance. They are the building blocks of our civilization”とし、子どもの心を育てていくことはおとなの責任であり、また喜びでもある、と続けている。

石坂浩二さんが、初代館長だったということである。ワイルドスマスの『マザー・ゲース』(1964)は、彼が訳している。

42) 村上康成美術館

ワイルドスミス絵本美術館から、車で数分のところにある。緑の中に建つ高原のおうちといういでたちである。一階は、グッズが並べられたスペースで、展示場は地階である。

ボローニャ国際児童図書展グラフィック部門で三度の受賞、また、ブラチスラバ絵本原画展金牌受賞などの経歴を持ち、多くの絵本を出版すると同時に、釣りをはじめとして戸外での活動を愛する村上氏は、ワイルド・ライフ・アートも制作している。

訪問したときは、動物たちを描いたものの他に、『ランドセルがやってきた』(2009)の原画が展示されていた。興味深いのは、氏の原画展示に関する考え方である。原画は、それだけで独立した芸術品として鑑賞されるものではなく、あくまでも、絵本として完成されて初めてそこに意味が生まれるものであるとする立場であり、そう割り切った上での展示のようである。以下に、作家の言葉を引用する。

「本来、原画は作品ではありません。あくまでも、いわゆる本の形態こそが目的地であり、絵と文とそのデザインの複合を印刷製本されて作品だということです。乱暴な言い方かもしれませんが、原画とは作品のための素材であるだけのことと思っています。

……ただ、そこに見え隠れしている制作の息づかいのようなものを、別の感覚で感じていただくのも、結果的に作品としての絵本への思いにつながるはずです。」

(BOOKEND, 第2号54)

絵本原画に対する思いの一つの方向性を示すものとして、興味深い。

帰ってから、全く異なる雰囲気 of 絵本二冊、中川ひろたか／文、村上康成／絵の『四字熟語ショウ』(2007)と、日野原重明／文、村上康成／絵による『いのちのおはなし』(2007)を入手した。

2月16日(月)

43) 戸田幸四郎絵本美術館

伊東線で、熱海から二つ目の伊豆多賀(無人駅)から、タクシー。山の上であり、景色がすばらしい。

戸田氏のデザイン化された絵がおもしろかった。赤ん坊や幼児には、戸田氏が描かれるような、くっきりした形やはっきりした色がいいのだろう。ディック・ブルーナの絵を思い出した

国内の絵本美術館・児童文学館を訪ねて（石原）

りする。『英和じてん絵本』（1999）がおもしろいので入手した。単語の意味説明、例文ともによく、小さな絵がついていて、見ているだけで楽しくなる辞書である。

研修旅行(15)

2月25日(水)

44) 『バレエ ピーター・ラビットと仲間たち』公演

東京・渋谷のBUNKAMURAで、熊川哲也率いるKバレエ・カンパニーによる『バレエ ピーター・ラビットと仲間たち』を観る。「英国バレエの神」サー・フレデリック・アシュトンの振り付けで、元は映画（1971）であったそう（公演チラシより）。イギリスでも大人気とのことである。ベアトリクス・ポターのストーリーを用い、衣装も彼女の絵の中の絵に描かれているものを忠実に再現している。動きにくそうな衣装を着け、その上動物の頭の被り物をかぶったままで、よく跳びはねたり廻ったりできるなど、感心することしきり。ダンサーの動きが、動物の動きになっている。子どものみならず、大人も楽しめる素晴らしい作品である。ピーター・ラビットはもとより、あひるのジマイマ、カエルのジェレミー・フィッシャー、小さなねずみや、こぶたのピグリン・ブランド、りすのナトキンなど、おなじみの動物たちが登場し、ポターの描いた動物の世界を、さらに夢をもって作り出していた。

2月26日(木)

45) 世田谷文学館

『進める荒井良二のいろいろ展—自由度進行形・荒井良二のあたらしい居場所はここだ！ああでもR！こうでもR！』。この展示タイトルから、すでにわくわく感が伝わる。絵本の原画や、雑誌“Hanako”、“Olive”などの挿絵、絵本、絵の具、画材、お気に入りのものたちなど、いろいろなものを見ることができ、おもしろい。展示場内に作られた小屋に入り、鳥の声を聞き、まわりに描かれた景色を望遠鏡で眺めるといふ疑似山小屋体験も楽しい。自由な雰囲気の中での荒井さんの展示は、見るものを愉快的気分にしてくれる。また、チラシも最高に素敵。おかしやさんなどで昔使っていたような薄い紙袋を用い、その両面にチラシ広告！なんとすごいでしょう。なんでも入ります、その袋の中には。

46) 三井記念美術館

特集『三井家のおひなさま』を見る。女子の成長を祈って作られたお人形たち。人形はもとより、衣装や豪華なお道具に感心する。

2月27日(金)

47) 東京都美術館

『生活と芸術—アーツ&クラフト展—ウィリアム・モリスから民芸まで』が開催中。ウィリアム・モリスの壁紙・織物、そして、アーツ&クラフト運動の家具は、今まで何度か目にする機会があったが、ル・カイン絵本を研究するようになってから、デザインに対してさらに強い関心を持つようになった。今回、特に気にかかったのは、自然の取り込みとそのアート化、そしてその図像の美しさである。デザイン化・抽象化されることで、秘められた自然の力が一層深まるところがすごいと思う。

D. G. ロセッティのステンドグラス・パネルなども紹介され、興味が引かれた。また、ここでも、イワン・ビリービンの絵本に出会うことが出来た。日本の民芸運動へつらなる流れがたどられており、興味はつきなかった。

研修旅行(15)

3月25日(水)

48) ちひろ美術館 東京

三月からの展示は、出版記念展『ちひろ 花の画集』と、企画展『ミュンヘン国際児童図書館架空の絵本展—世界の絵本画家72人が描いた、本のない絵本—』である。

ちひろさんのコーナーでは、『こどものしあわせ』の表紙画について彼女が書いた文章が掲示されており、その内容に強く引かれた。ちひろさんは、「働いている人たちに共感してもらえる絵」には「ドロ臭さ」が必要ではないかと思いつつも、自分の描く子どもたちには、いつも「夢のような甘さ」がただよってしまうと、悩んだ時期があったそうだ。しかし、『こどものしあわせ』において彼女が採った方法は、自分の一番よく知っている母と子の姿を描くことであった。こうして、彼女は、次のように思ったということである。「そして、おもいました—これからは、「ドロ臭さをださなければ」などと苦しむのは、もう、やめようと」(63年、3、4月合併号)。こうした自分の信じていることを通す強い信念に、学ぶところが多い。

『ミュンヘン国際児童図書館架空の絵本展』は、世界中の作家たちが、こういう絵本を描きたいなという思いを絵にしたもので、絵の横に、それぞれのアイデアが説明されている。完成したらどんな絵本になるのか、見る人が自由に想像してみるのもおもしろい。絵本の創作過程に自分も参加する気分であるから楽しい。ピーター・シスは、次のように言っていた。

Imagining is a very important, perhaps the most important, part of the creative process

So the exhibition of the “imaginary” books is very special . . . because it is like an exhibition of wonderful dreams. And we know . . . that sometimes . . . ever (even) the dreams become truth

国内の絵本美術館・児童文学館を訪ねて（石原）

（「出展画家たちから寄せられたメッセージ」ファイルから）

「想像力」「創造」「夢の実現」、どれも大切な、大切な言葉である。

3月26日(木)

49) 大東文化大学 ビアトリクス・ポター資料館

品川から山手線で池袋まで。そこから、東部電鉄東上線で高坂駅へ50分。バスで5分のこども動物自然公園内にある。

資料館は、ポターの幼少期のデッサンから、ピーター・ラビットの初版本はもとより、1927年、ナショナル・トラストの資金集めのために描いた水彩画や、さらに後期の鉛筆デッサンなどと幅広く収蔵しており、世界的にも重要なコレクションとして知られている。さらに、ピーター・ラビットの出版によって有名になる前の、挿絵画家としてのポターの活躍ぶりを伝える貴重な作品や、彼女の直筆の手紙、ピーター・ラビットたちをモデルにしたおもちゃ、世界のさまざまな言語への翻訳本、そして、研究書などが数多く展示されている。係りの方に、貴重な『Beatrix Potter Collection 文献目録』をいただいた。

ポターの24作品すべての初版本が揃っている。また、ピーター・ラビット誕生前に、ポターが二度にわたって自費出版した本も、両方とも収蔵されている。まだまだ貴重な作品があるが、ここで、ひとつひとつをあげることはできない。

資料館は、建物としても興味深い。ポターが住んだヒル・トップ農場をモデルにしており、庭や、玄関、正面の階段をできるだけ忠実に再現しようとした、ということである。庭には、ピーターがマクレガーさんに追いかけられたときに飛び込んだものを思わせるじょうろがころがっている。これは、イギリスから取り寄せたアンティークなのですよと、資料館の方が説明して下さった。ポターの庭に近づくように同じような花々を育てようとしているが、気候風土が異なるため、なかなか難しいということであった。建物は2006年に建てられた。ヒル・トップの雰囲気を出そうと思えば、古めかしく見せるよう技術上可能ではあったが、あえてそうした方法を取らなかった、と当館のパンフレットに書かれている。「この資料館を一から始めた気持ちがあったから」ということである。自然との共存を提唱し、自らもそうした生活を実践したポターの資料館にとって、時と共に自然に育っていくことを選ばれた決意は、まさにポターの意にかなうものであると言える。

50) 国立国会図書館 国際子ども図書館

『ゆめいろのパレットⅣ—野間国際絵本原画コンクール入賞作品アジア・アフリカ・ラテンアメリカから—』を見に行く。「さまざまな事情により作品発表の機会に恵まれないアジア、アフリカ、ラテンアメリカ地域の芸術家を対象」（同展チラシ）として、二年に一度開催されるコンテストである。貴重なコンテストであると思う。コスタリカのウェン・シュウさんの『ナ

ディとシャオ・ラン』がグランプリを取っていた。ラテンアメリカの子どもと中国の子どもが友達になるという話で、コスタリカの切り絵と中国の切り絵細工の融合がおもしろく、美しい作品であった。資料集を入手する。

3月27日(金)

51) 軽井沢絵本の森美術館

軽井沢に近づくにつれ、雪が降り出す。

どうしても来たいと思っていた美術館。美術館の敷地を構成する15000平方メートルの森は、一部工事中であった。ガーデン・デザイナー、ホーティカルチャリストのポール・スミザー氏の設計で、ピクチャレスク・ガーデンを育て、より快適な場所へと手入れされるらしい。ギリシャ神話に登場する、芸術、学問など、人間の知的活動をつかさどる女神たちの名を冠した「ムーゼの森」は、その名にふさわしい創造と安らぎの空間となるだろう。完成は2010年5月ということであるが、「開設までの間、ガーデン・デザインや施工過程などをお楽しみいただけます」(当館の“Topic & 2009 Schedule”)という館長の言葉には、前日に訪れたピアトリックス・ポター資料館に見られた、時とともに育てていく・育っていくという姿勢が共通してうかがわれ、興味深かった。

森のあちこちの日陰に、その朝に激しく降った雪が残り、ひんやりとした空気の中、いくつかある絵本の館へと入る。絵本が置いてある図書館は、木で作った丸い建物で、入館者をやさしく誘う。机やイスもまわりを囲む書棚も、すべて木製で、寒い日であるが温かみを伝える。書棚が低く設計され、子どもの背の届く高さに留めてある配慮がやさしい。

この美術館の基礎となった吉田新一氏のコレクションを収蔵する吉田新一文庫は整理中で、見ることができなかったのは残念であったが、次の機会の楽しみとしよう。

第一展示館では、『欧米絵本の歩み(春の企画)』を見学する。ABC絵本の特集が興味深かった。他にも、木葉井悦子のアトリエがあり『木葉井悦子と自然』が開催されていた。

第二展示室では、『現代ヨーロッパの絵本展—地域色豊かな絵本表現』という企画。様々な国の絵本の特徴をとらえようとする試みであった。ここで、ル・カインの原画を数枚見ることができた。*The Twelve Dancing Princesses* (1978) の表紙や、*Mrs. Fox's Wedding* (1980) の中の絵があった。

52) エルツおもちゃ博物館

軽井沢絵本の森美術館から通りをはさんで、真向かいにある。『あそびを育むおもちゃ展—いろ・かたち・素材が拓げる創造の世界』が開催中であった。ドイツ・エルツ地方で作られている木製のおもちゃを集めている博物館だということである。また、フレーベルやシュタイナーなどの教育学者の考えを受け継いで作られた、おもちゃがいくつもあった。シンプルである

のがいいのだろう、色や形が美しかった。

53) バイネ美術館

エルツおもちゃ博物館から徒歩で10分程のところにある、軽井沢タリアセン内に位置する。見るひとの心を温かくしてくれるバイネの恋人たちの絵は、「愛で世界中をひとつにしたい」という気持ちで描かれたらしいことが、そのパンフレットに記されている。この美術館として使われている古い日本家屋は、フランク・ロイド・ライトの弟子が建てたものとかで、歴史的な意味があるそうだ。

3月28日(土)

54) 『まどさん100歳展』

銀座にある教文館のビルの9階のホールで開催中。よく知られる童謡「ぞうさん、ぞうさん、おはながながいのね」の作者である。詩や、抽象画、イラスト、未発表原稿などが展示されている他に、100人の知人からの誕生日の祝いのメッセージも掲げられており、興味深かった。「この童謡も、このひとが書いていたのか」と気づいたり、最近の詩を読んで、ほほえましくてにっこりしたり、という時間であった。そのあと、この書店の児童文学コーナー「ナルニア国」を訪れた。たくさんの本に出合えて、楽しかった。児童文学に関する催し物も多く企画されているようで、うらやましい限りである。

以上が、平成20年度の国内研究の成果の一部である。筆者は、国内研究員期間を終えたあとも、子どもとおとなに豊かな時間をもたらす絵本・児童文学の魅力をさぐり、それをひとに伝えるため、つよい熱意をもって研究を進め、絵本美術館を訪ねる旅を続けている。

一年間、本当によい経験をさせていただきました。実り豊かな時間でした。ありがとうございました。

なお、この研究展望は、先に発表した『わたしのくすり箱——絵本の窓から眺めたこと——』（関西大学『外国語学部紀要』創刊号 2009年10月発行）と一連のものである。あわせてお読みいただければ幸いです。

本研究は、平成20年度関西大学国内研究員研究費によって行った。

外国語教育フォーラム 第9号

2008年4月2日	大阪府立国際児童文学館	大阪府吹田市
11日	日本郷土玩具博物館	広島県福山市
	かぐや姫美術館	広島県竹原市
12日	金子みずず記念館	山口県長門市
	安野光雅美術館	島根県鹿足郡津和野町
13日	夢路郷土美術館	岡山県岡山市
	倉敷チボリ公園	岡山県倉敷市
14日	日本郷土玩具館	岡山県倉敷市
24日	ちひろ美術館 東京	東京都練馬区
25日	世田谷文学館	東京都世田谷区
	板橋区立美術館	東京都板橋区
	出光美術館	東京都千代田区
	相田みつを美術館	東京都千代田区
26日	国立国会図書館 国際子ども図書館	東京都台東区
5月10日	「絵で読む宮沢賢治展—賢治と絵本原画の世界」 静岡アート・ギャラリー	静岡県静岡市
11日	箱根 サン＝テグジュペリ 星の王子さまミュージアム	神奈川県足柄下郡箱根町
12日	本間寄木細工美術館	神奈川県足柄下郡箱根町
13日	葉祥明美術館	神奈川県鎌倉市
30日	ちひろ美術館 東京	既出
6月1日	中近東文化センター附属博物館	東京都三鷹市
20日	絵本児童文学研究センター	北海道小樽市
21日	第11回絵本学会大会 於：藤女子大学	北海道札幌市
22日	絵本児童文学研究センター	既出
24日	北海道立旭川美術館	北海道旭川市
7月3日	安曇野ちひろ美術館	長野県北安曇野郡
4日	安曇野ちひろ美術館	同上
14日	黒井健絵本ハウス	山梨県北杜市高根町清里
	絵本ミュージアム清里	山梨県北杜市高根町清里
15日	安曇野ちひろ美術館	既出
17日	安曇野ちひろ美術館	既出
11月26日	ちひろ美術館 東京	既出
	トムズボックス	東京都武蔵野市
27日	国立国会図書館 国際子ども図書館	既出
	台東区立下町風俗資料館	東京都台東区
28日	相田みつを美術館	既出
12月18日	沖縄県立図書館	沖縄県那覇市
19日	恩納ナビ資料館	沖縄県恩納村
2009年1月12日	ふくやま文学館	広島県福山市
13日	安野光雅美術館	既出
14日	広島県立図書館	広島県広島市
	広島美術館	広島県広島市
29日	徳島県立文学書道館	徳島県徳島市

国内の絵本美術館・児童文学館を訪ねて（石原）

2月5日	九州国立博物館	福岡県太宰府市
6日	祈りの丘絵本美術館	長崎県長崎市
7日	福岡アジア美術館	福岡県福岡市
	福岡文学館	福岡県福岡市
14日	葉祥明美術館	既出
15日	ワイルドスミス絵本美術館	静岡県伊東市
	村上康成美術館	静岡県伊東市
	川奈ステンドグラス美術館	静岡県伊東市
16日	戸田幸四郎絵本美術館	静岡県熱海市
25日	『バレエ ピーター・ラビットと仲間たち』公演	東京都渋谷区
26日	世田谷文学館	既出
	三井記念美術館	東京都中央区
	art-bookshop	東京都千代田区
27日	東京都美術館	東京都台東区
3月25日	ちひろ美術館 東京	既出
26日	大東文化大学 ベアトリックス・ポッター資料館	埼玉県東松山市
	国立国会図書館 国際子ども図書館	既出
27日	軽井沢絵本の森美術館	長野県北佐久郡軽井沢町
	エルツおもちゃ博物館	長野県北佐久郡軽井沢町
	ペイネ美術館	長野県北佐久郡軽井沢町
28日	『まどさん100歳展』教文館ホール	東京都中央区

本文中に挙げた本

- Caudill, Rebecca, illustrated by Ellen Raskin. *Come Along!* New York: Holt, Rinehart and Winston, 1969.
- Corrin, Sara and Stephen, retold, and illustrated by Errol Le Cain. *Mrs. Fox's Wedding*. New York: Doubleday & Co., 1980.
- De La Mer, Walter, retold, and illustrated by Errol Le Cain. *Molly Whuppie*. London: Penguin, 1985.
- De Saint-Exupéry, Antoine, translated by Richard Howard. *The Little Prince*. New York: Harcourt Inc., 2000.
- Eliot, T. S., illustrated by Errol Le Cain. *Mr Mistoffelees with Mungojerrie and Rumpelteazer*. London: Faber & Faber, 1990.
- Lang, Andrew, retold, and illustrated by Errol Le Cain. *Aladdin and the Wonderful Lamp*. New York: Viking Press, 1981.
- Mongomery, L. M. *Anne of Green Gables*. London: Puffin, 1908, 2008.
- Pater, Walter, illustrated by Errol Le Cain. *Cupid and Psyche*. London: Faber & Faber, 1977.
- Raskin, Ellen. *Nothing Ever Happens on My Block*. New York: Macmillan Publishing House, 1966, 1989.
- . *Spectacles*. New York: Atheneum, 1968.
- . *The Westing Game*. New York: Puffin, 1978, 1997.
- The Brothers Grimm, illustrated by Errol Le Cain. *Thorn Rose*. London: Faber & Faber, 1975.

- . *The Twelve Dancing Princesses*. London: Faber & Faber, 1978.
- Tudor, Tasha. *A is for Annabelle: A Doll's Alphabet*. New York: Simon & Schuster, 1954, 2004.
- . *Corgville Christmas*. Pennsylvania: Front Street, 2002.
- . *I is One*. New York: Simon & Schuster, 1956, 2000.
- Wildsmith, Brian, illustrated. *Mother Goose: A Collection of Nursery Rhymes*. New York: Oxford University Press, 1964, 1999.
- 相田みつを／書・詩 いわさきちひろ／絵 『みんなほんもの』 ダイヤモンド社 2008
- 相田みつを／書 佐々木正美／文 『育てたように子は育つ あいだみつを いのちのことば』 小学館 2007
- あいはらひろゆき／文 あだちなみ／絵 『くまのがっこう』 ブロンズ新社 2002
- アンデルセン／原作 S. エイドリゲビシウス／絵 今江祥智／訳 『スノー・クイーン』 西村書店 1992
- 安野光雅 『天動説の絵本—てんがうごいていたころのはなし—』 福音館書店 1979, 2008
- 『蚤の市』 童話屋 1983, 2005
- 糸満園子・金城ケサ子／文 西村貞雄／絵 『ごーやー』 沖縄時事出版
- いわさきちひろ／著 ちひろ美術館／編 『ちひろ 花の画集』 講談社 2009
- 大川悦生／文 太田大八／絵 『へっこきあねさが よめにきて』 ポプラ社 1982
- 太田大八 『かさ』 文研出版 1975
- 『ながさきくんち』 童心社 1980
- 久野真知子・石川キヨ子／文 安室二三雄／絵 『がんばれハーリー』 沖縄時事出版
- コメニウス, J.A. 井ノ口淳三／訳 『世界図絵』 平凡社 1995
- 大道あや／語り・画 『へくそ花も花盛り—大道あや聞き書き一代記とその絵の世界』 福音館書店 2004
- 田島征彦 『とんとんみーときじむな』 童心社 1987, 2008
- ちひろ美術館コレクション 『ちひろと世界の絵本画家たち』 講談社 2000
- デイビス, アンシア／再話 エロール・ル・カイン／絵 『サー・オルフェオ』 ほるぶ社 2004, 2006
- 戸田幸四郎 『英和じてん 絵本』 戸田デザイン研究室 1999, 2008
- 新美南吉／作 黒井健／絵 『ごんぎつね』 偕成社 1986, 2007
- 『手ぶくろを買いに』 1988, 2007
- BOOKEND 第2号 絵本学会発行 フィルムアート社 2004
- 中川ひろたか／文 村上康成／絵 『四字熟語ショウ』 ハッピーオウル社 2007, 2008
- 『ランドセルがやってきた』 徳間書店 2009
- 日野原重明／文 村上康成／絵 『いのちのおはなし』 講談社 2007, 2008
- 堀内誠一／編 『絵本の世界 110人のイラストレーター vol.2』 福音館書店 1984, 2004
- 森山京／文 黒井健／絵 『ぶたのモモコとフルーツパーラー』 小峰書店 1993
- 葉祥明 『アンネのバラ』 出版文化社 2002
- 吉田新一 『絵本／物語のイラストレーション』 日本エディタースクール出版部 1999
- ワイルドスミス, ブライアン／絵 石坂浩二／訳 『石坂浩二のマザーグース』 エム・エ・エム 1992